

## 歌集『ともしび』における茂吉の「いのちのあらはれ」(1)

東 出 市二郎\*

### MR. MOKICHI SAITOH'S "APPEARANCE OF LIFE" IN HIS POETICAL WORK "TOMOSHIBI" (A LIGHT) (1)

Ichijiro Higashide

Today it is said that Mr.Mokichi Saitoh is a greater poet than any other poet in Japan, because of his enormous literary achievements. His first complete works (starting on May 5th in 1952) and the 2nd (January 13th in 1973) which were published by Iwanami Bookstore.

He could be called a literary immortal in the Meiji, Taisho, and Shouwa periods, considering his 17 volumes of poetical works (18,000 poems) including "Shakkou", a literary review of poetry on "Douba mango" (9th to 14th volumes of his complete works), his essays including "Nenju-shuu" (the 5th to 8th), his notes and diaries (the 27th to 32nd), a study on "Kakinomotonohitomaro" (5 volumes) and other study books & commentaries.

Many study books on Mr.Mokichi Saitoh, who lived his life for his tanka (Japanese verse) art activities, have continued to be published after his death. I have more than 250 copies. Even now we can learn a great deal from his works.

In "An Introduction of Mr.Mokichi Saitoh" edited and written by Takeo Fujioka, who observed judging from his literary style that there were four lofty peaks in his 17 volumed poetic works. The first lofty peak can be seen both in his poetic work "Shakkou" and the second "Aratama". The 2nd peak occurs in the 6th poetical works "Tomoshibi", after Saitoh studied abroad in Europe. This observation has interested me a great deal.

In this manuscript I will research Mr.Mokichi Saitoh's lyricism and spirit through his poetic works "Tomoshibi" from his tankas, diaries, essays. I am researching in his works "On appearance of life" and "On an expression of life in the unification between nature and self attaining spiritual illumination." I will study this subject keeping in mind Saitoh's view-point of "nature, climate, and gods & buddhas" in his life.

---

\* 教養部

## 1. 趣 旨

歌人斎藤茂吉の膨大な文学業績は、第1回配本が昭和27年5月7日に始まる全集、ならびに、昭和48年1月13日第1回配本になる全集（共に岩波書店刊）によっても分かるように、今日比肩する歌人はいないといえよう。『赤光』等17冊の歌集（約18,000首）、全集<sup>1)</sup>（以下第2回発行全集をいう）第九巻～第十四巻に収められた『童馬漫語』等の歌論、第五巻～第八巻に集録された『念珠集』などの随筆、第二十七巻～第三十二巻の手記・日記、そして『柿本人麿』研究の5冊本や他の研究書・評釈の類などにみられるとおり、明治・大正・昭和の文学者としての業績は、不滅と言わねばならない。

短歌芸術活動に生きた茂吉に対する研究書もまた、その生前、没後を通して続刊され、私の蔵するものだけでも250余冊であり、まことに多くの課題を語りかけてくれるところである。藤岡武雄編著になる『斎藤茂吉入門』<sup>2)</sup>では、その作風からみて17冊の歌集には四つの高峰があると指摘する。第一歌集『赤光』<sup>3)</sup>・第二歌集『あらたま』<sup>4)</sup>を第一の峰とし、ヨーロッパ留学を終えて帰朝してからの第六歌集『ともしび』<sup>5)</sup>を、茂吉の第二の高峰としているところに、私は大きな関心を抱くところである。

本稿においては、その歌集『ともしび』時代の茂吉の抒情とその精神を、短歌・日記・随筆等から探り、茂吉のいう「いのちのあらわれ論」ならびに「實相に観入して自然・自己一元の生<sup>い</sup>を寫す」の論をその作品から探ろうとする。とりわけ、茂吉の生の中の「自然、風土、神仏」の視点から考察しようとするものである。

## 2. 『ともしび』時代の茂吉の艱難の生とそれを支えるもの

### (1) 火難における茂吉の艱難

『ともしび』の茂吉の「後記」は、第二歌集『あらたま』の「編集後記」152行（全集の版組による。この稿以下これによる）に次いで多い80行を費やしている。『あらたま』の編集後記の内容は、日記風でもあり、作品の改作の実際の説明などにもかなりの行数を費やしているし引用作品も、8首のみであるが、『ともしび』の場合は、作品37首を引用しながら火難の中の生から立ち上がり、短歌制作へその生を高めて行こうとする茂吉の精神を読み取ることができる。「後記」の末尾に、

この歌集に「ともしび」と命名したのは、艱難暗澹たる生に、辛うじて『ともしび』をとばして歩くといふやうな暗指でもあっただらうか。

と記しているように、まさに、

「焼けあとにわれは立ちたり日は暮れていのりも絶えし空しさのはて」

なのであった。大正十三年十二月三十日の、欧州留学からの帰朝途上で青山脳病院全焼の報を受けた時の日記（約2,800字）の中に、茂吉は、

僕ハ三年間儉約シテ買ッた書物ハ全部焼ケテ。(注・帰朝前に斎藤家に送り届けられていたもの) ソノホカ童馬漫語ノ未発表ノモノ澤山モ全部焼ケタ。長崎時代ニ詠ンダ歌、マタハソノ未完成ノ歌モ全部焼ケタ。子規ノモノナドモ全部焼ケタ。シカシ父ノ事業ガ全部焼ケタノデアッタ。苦闘六十五年ノ事業ガ全部焼ケテシマッタノデアッタ。(中略) 僕ノ書物ガ全部焼ケタトスルト、僕ハタゞ製作スルヨリ道ハナイ。考證モノナドハ出来ナクナッテシマッタノデアル。

と記しており、「いのりも絶えし空しさのはて」と詠ずる他無い状況にあった。

青山の病院に帰着したのは、明けて大正十四年一月七日であったが、当時のことについて、『ともしび』の「後記」には、短歌を引用しながら、

- ・青山の家に歸って來た時には未だ餘燼が立ってゐた。以來私は艱難の生活をした・・・・。
- ・私は病院の復興に精根をつくしたけれども、辛うじて作歌をつづけることが出来・・・・。

「かへりこし家にあかつきのちゃぶ臺に火焰の香する澤庵を食む」

「ゆふぐれはものの音もなし焼けはててくろぐろと横たはるむなしさ」

- ・作歌は本業に力を致したがために、飛躍は無かったが、西洋で作ったもののやうな、日記の域から脱することが出来た。

「うつしみの吾がなかにある苦しみは白ひげとなりてあらはるるなり」

「白ひげとなりてあらはるるなり」の歌は、島木赤彦も褒めてくれたりしたものであった。

「娑婆苦より彼岸をねがふうつしきは山のなかにも居りにけむもの」

「娑婆苦より彼岸を願ふ」の歌は、芥川龍之介氏が私の會ふたびごとに、この歌のことを話した。などと記している。

艱難な病院復興事業について努める傍ら、昭和元年ごろには、

「むなしき空にくれなゐに立ちのぼる火炎のごとくわれ生きむとす」

と詠じ、「あまつ日の無くなることを悲しみて踊りし神代おもほゆるかも」「寺のなかのとりししろき電燈に蠅螂飛べり羽をひろげて」と詠じ、人目を牽いたものであったと歌に輝きをにじませている。これら「後記」にあらわれてくる茂吉に先だって、大正十四年十二月三十一日、大晦日の日記の記述の

- ・今年ハ實ニ悲シイ年デアッタ。苦難の年デアッタ。歸朝シテミルト家モ病院モ全ク焼ケテキテ圖書ガ先ヅ全滅デアッタ。「サウイフ苦シミノウチニ父上ハ松原ニ土地ヲ借りテ、受負ノコトデゴタゴタシタガ兎ニ角工事に著手シタ。」「九月下旬頃カラ金策ノコトデサシ迫リ、ドンドン話ガハズレテ行ッテ思フヤウニ行カズ、セツバツマッタノデアルガ、十二月廿八日ノ期限前ニドウニカ片ガツイタ。カクシテ凡ベテノ苦難ガ兎ニ角切り抜ケラレタ。」「コレハ神明ノ御加護デナクテ何デアルカ。天地天明ニ感謝シ奉ル。」

には、翌年を期して待つ思いがにじんでいる。まさに、「火炎のごとくわれ生きむとす」の情であり「蠅螂飛べり羽をひろげて」の生氣であっただろう。

## (2) 艱難と多忙の中に行動する人間茂吉

『赤光』で、「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはず天に聞こゆる」と詠嘆した「死にたまふ母、五十九首」、「この心葬り果てんと秀の光る錐を疊に刺しにけるかも」と嘆いた「おひろ、四十四首」などにみえる別離の中の生とは異質の身をけずる四十歳半ばの茂吉であった。『アララギ』齋藤茂吉追悼号の青木義作の文<sup>6)</sup>によれば、「歸朝早々不自由な生活を送りながら病院の再建のために日夜伯父と共に奔走した。(中略) 當局の方針で精神病院は郊外でなければ許可せぬとのことで、先づ最初から敷地の問題で困惑した。一萬坪内外の土地を青山から便利な郊外に求めることは中々容易なことではない(中略) やつとのことで府下松澤村松原に八千五百坪の土地を借りることに成功したのはその年の五月頃であった。(中略) 第一期計畫で約十萬圓を要する見込みであったが、當時としてはかなりの大金であった。實を云ふと病院が焼けたとき火災保険がつけてなかった。(以下略) そういうことであったため、茂吉は長崎にまで金策に出かけたりした。生活詠の中の次の三首は直接的である。

「かへりちの汽車の中にもても病院の復興の金おもひて止まず」

「金圓のことはたやすきことならずしおしおとして歸り來れり」

「うつそみの吾を救いてあはれあはれ十萬圓を貸すひとなきか」

今まで金のために苦勞したことは左程なかった先生のことを、青木は述懐しているのである。こうした艱難の、暗澹たる日々を乗り越えようとする茂吉の精神力はいったいどこから生まれたのであるか。作歌や著述(この年の四月に自選歌集『朝の螢』再刊。大正十五年四月、『金槐集私鈔』刊行、五月に再びアララギ編集発行人となる。)を「業餘」として行くのである。茂吉の情念をかりたてて行くその源は、どこにあっただろうか。本業、作歌、著述を何が支えたのであろうか。

その一つは、茂吉が十五歳のころまで過ごした金瓶村であり、父・母であり、隆應和尚の宝泉寺であり、出羽三山の郷里である。茂吉生家の隣の宝泉寺に遊び学んだ幼少時代、民族的神仏尊崇の農村生活において育まれていったもの、丹念に日記を綴っていた父、仙台にすら一度も出かけることなく、村に住み子の病いに仏に参詣する母、修験の羽黒山、伝統保持の傾向の強い湯殿派の系統の神社など、茂吉の心の育ちに強く関わった東北の民族的な農村の生活と自然や風土のことが、『ともしび』の時代を乗り越える背景にあると考えられてよい。<sup>7)</sup>

病院復興のための切迫した日々の茂吉の生を支え、日記風ではないと自らも語れる詩情の世界を取りもどす支えとなったもの、それらは、茂吉の生の中に自然から祖先から自ら受け継いだ伝統的民族な普遍性の高い精神があったからということになる。『ともしび』の作品には、大正十四年の作にこそ「歸國」「火難」「焼あと」「随縁近作」「長崎往反」の五十余首の苦難がうたわれるが、その多くは、「近江蓮華寺行」「木曾」「高野山」「箱根」「永平寺」「信濃」などや、昭和三年の「三山参拝の歌」等である。即ち、神仏や自然の中に入りこんで、心の平安の中に己の精神を見ようとする茂吉の沈静した作歌活動の所産としての『ともしび』であった。

### (3) 「いのちのあらはれ・茂吉」と出羽三山・父と母

遡って茂吉の生を考えてみるに、私が最も強く感じる茂吉の力は、明治四十四年に発表している「いのちのあらはれ」<sup>8)</sup>あたりにみることが出来るように考える。この小論は、『童馬漫語』<sup>9)</sup>に収録されているが、『赤光』『あらたま』の両歌集の底辺をなす、茂吉の内部急迫を起点とする挽歌的世界でもある。

- ・「奇抜な歌」「天分の豊かな歌——一部の評家はかういふ歌に向かって讃嘆の詞を惜しまなかった。——今まで少し作歌に苦勞したわたくしには悲しむべき事實である。——奇抜だと見えるのは單に本心を遠ざかった手先の浅い運動に過ぎない。自己のやみがたい「生」に根ざした調べではなくて、——。
- ・短歌は直ちに「生のあらはれ」でなければならない。従ってまことの短歌は自己さながらのものでなければならぬ。一首を詠ずればすなはち自己が一首の短歌として生まれたのである。わたくしは自己をいとほしまねばならぬ。自己の「いのちのあらはれ」なる短歌はこの意味においていとほしいのである。されば作歌の際は飽くまでこの「いのち」をいとほしみ、ふみ据ゑて、その表現に際して厳かでなければならぬ。

「いのちのあらはれ論」の中心をなす茂吉のことばをここに抄出したが、「自己さながら」「いとほむべき自己」「その所産としての短歌」となると、それは茂吉の人間そのものであり、幼少の時代から己の中に育ってきた人間観であり生きぶりなのである。それは共に生活をした父であり母であり隆應和尚であり、出羽三山でもあり最上川の大自然なのである。長じてなお方言で過ごした東京帝國大学医科大学での学びの姿や第一高等学校当時の崇敬の的であった狩野校長への私淑など、ことごとく「私の弱さ淺薄さを暴露するやうなもので恥入る」と『念珠集』<sup>10)</sup>に自己開示する茂吉なのである。そうした「自己さながら」の所産としての「いのちのあらはれ」の短歌を求めた茂吉であった。

茂吉の幼少期を略述するならば、父と母の生き方、隆應和尚、修験の三山あたりに触れなければならぬと思う。育った風土がその人間の生の感性をはぐくみ、生涯の生きぶりに深い影響を及ぼすことは、多くの人々が体験する。

「地獄極樂園」の歌や「月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒は出でず蟲鳴けるかも」「萱ざうの小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ」「とほき世のかりようびんがのわたくし児田螺はぬるきみづ恋ひにけり」から始まって、その晩年の歌にまで、日本民族的な農村の生活と自然・風土の中ではぐくまれたものを、彼ほど自在に短歌表現の中にひき入れてうたった歌人は類例を見ない。(中略) 茂吉の心に大きな影響を与えていることは、今後もっと追求されなければならぬ問題である。<sup>7)2)</sup>

と、岡野弘彦は述べた。「山と里の神仰」<sup>11)</sup>によれば、いわゆる地域社会の靈山、たとえば出羽三山とか、富士山、御嶽、蔵王や白山といった高山は、雲霧を起こし、雷雨をもたらす源とされ、その場所は山神が支配し、同時に水神の力も働いているとする。『念珠集』の「初詣」は、

明治二十九年に丁度僕が十五になったので、父は湯殿山の初詣に連れて行った。(中略) 僕

も父もしばらくの間毎朝水を浴びて精進し（中略）一厘錢<sup>りんせん</sup>を一つ一つ鹽で磨いて養錢<sup>さいせん</sup>に用意した。（中略）湯殿の山に参拝して、「初まり<sup>ねがひ</sup>」の願を遂げた。」（後略）  
のように記され、道中の豪雨や一面の水でうずめられた谿の危険な場を、「茂吉匍ええ。べたと匍え。」という父の鋭い声に従って進んだ記憶が記されている。

平地に住む農耕の人々にとって山岳は大きな意味を持つ。山嶽の神への畏敬の念は、愛着となる。私などの場合でも今なお抱き続けている丹後由良岳には、ふり返れば限りない平安と愛着を思う。「ともしび」は、

「腰すでにまがりし父とこの里にひと夜宿<sup>やど</sup>りしことしおもほゆ」  
「神山<sup>かみやま</sup>にさしかかりつつ谷川<sup>たにがは</sup>のうへ吹く風に汗<sup>あせ</sup>ひえむとす」  
「わが父も母もなかりし頃よりぞ湯殿<sup>ゆどの</sup>の山に湯は湧きたまふ」  
「谷ぞこに湧きいづる湯に神<sup>かみ</sup>いまし吾<sup>われ</sup>の一世<sup>ひとよ</sup>も神のまにまに」  
「梵字<sup>ぼんじがは</sup>川とどろき落つる岸に立ちわれを育<sup>はぐく</sup>みし父母<sup>うちかは</sup>しぬばゆ」  
「この吾<sup>われ</sup>を護<sup>まも</sup>り給はなあはれあはれ父母<sup>うちかは</sup>のためをさなごのため」

などの「三山参拝のうた（七十七首）」を詠じている。茂吉を育んだ金瓶村は、出羽三山と共に息づく村びとの里であり、父母との思い出の地であり、「父母のためをさなごのため」に「吾を護り給はな」と詠ずるのである。「われの一世も神のまにまに」には、大自然としての悠久のいのちとしての三山への畏敬と尊崇の念があり、父・母・茂吉・をさなごと継ぎ行く自己の生への厳肅な思いが、「自然・自己一元<sup>うっ</sup>の生を寫す」とする茂吉の短歌に対する説を形成し、作歌にあらはれてくる。「自己が一首の短歌として生まれる」とする茂吉は、そこに「厳かさ」を求める。人間の生きを、自然の持つ厳肅な姿に合わせていこうとする感性は、かくして茂吉の精神に形成されたと考えたい。

「ともしび」に次ぐ第七歌集「たかはら」<sup>12)</sup>は、昭和4年、昭和5年の作をまとめたものであるが、茂吉は「をさなご」茂大を連れて三山参拝に出かけている。

「たかはら」の「後記」には、「昭和五年七月、長男茂太<sup>13)</sup>が十五歳になったのを機として、三山を参拝した。」「私が明治二十九年に父に連れられ湯殿山を参拝したのを追憶しつつ茂太を連れて歩いたのだが、今度は湯殿山のみならず、三山を参拝したのであった。」と記す。

「三山参拝初途」と題する歌の詞書きには、「長男茂太十五歳になりたるゆゑ、出羽三山に初詣せしめむとて出發す」と記されているが、「初詣せしめむ」に茂吉の生への根源的情意を見る。

「ほほの木の実はじめ見たる少年に暫しは足をとどめて見しむ」

「わが子にも鹽もて齒を磨かしむ山谷の底に夜は明けつつ」

に見える「見しむ」「齒を磨かしむ」にも、おのずからなる茂吉の神への姿勢をうかがうことができる。「ちはやぶる神ゐたまひてみ湯の湧く湯殿の山を語ることなし」なのである。

火難の後の空なる心を、事務的多忙の日々の茂吉を、故郷金瓶は三山と共々支えたに違いない。昭和五年の茂太との参詣の心が、茂吉の晩年にまで生<sup>いき</sup>のよりどころであったことは、最終の第17歌集「つきかげ」<sup>14)</sup>の「蔵王山」二首に見る思いがする。

「萬國<sup>ばんこく</sup>の人來り見よ雲はるる蔵王<sup>ざわう</sup>の山<sup>やま</sup>のその全<sup>また</sup>けきを」

「とどろける火はをさまりてみちのくの蔵王<sup>ざわう</sup>の山はさやに聳ゆる」

昭和二十五年、茂吉数え年七十歳の作である。この作に続けて、「無題」「みちのくの蔵王の山が一等に當選をして木通霜さぶ」「金瓶のわぎへの里ゆ蔵王見ゆ雲幾とほりにもなりて越える」がある。「この日ごろ」には、「われ釋くて蔵王の山のふりさけしころほひゆ五十年年を経にける」などもあり、茂吉が五十年余を、如何に蔵王の山と共に生きたかを物語るものと言えよう。艱難な時代を、茂吉はみちのくの山の神々を心に励んだことであろう。茂吉にとっての出羽三山は、まさに「自己さながら」であり、「いとほしむ」べき存在であった。茂吉の力の源泉であったと思いたい。『茂吉と上山・齋藤茂吉の生いたちとふるさと』<sup>15)</sup>で鈴木啓蔵は、

「つねづね自分は蔵王山の雪消えの水が流れ注ぐ金瓶に生まれ、その水を産湯につかわせてもらったのだ。そこでこの蔵王の山は、茂吉自身肉体の一部とも、また魂の寄りどころとも感じていたからではなかろうか。この二首こそ、誰にも頼まれて作ったというものでもない、心底からの叫びではなかったかと思うものである。」

と記述している。元上山市長という地元の人でなければ体感できない感じ方の文章であろう。

#### (4) 「いのちあらはれ」と隆應和尚

守谷茂吉の隣家であり菩提寺である時宗宝泉寺の住職佐原隆應については、黒江太郎著『隆應和尚と茂吉』『隆應の生涯と茂吉』<sup>16)</sup>に詳しい。守谷家は、隣家であり菩提寺でもある時宗宝泉寺の熱心な檀徒であった。茂吉は幼少にして住職隆應とかかわり育ち、宗教的な雰囲気と仏教知識を体感し学びとった。隆應和尚から「日本外史」を講じてもらい、また、習字もならった。『新訂版・年譜・齋藤茂吉伝』(藤岡武雄著)<sup>17)</sup>によれば、

「隆應と茂吉の性格には酷似した点が知られている。それは用のないときは目を閉じて沈黙する習癖、書簡に用件ごとの区切りとして大きい丸印をつける方法、自己の立場を持して動かない勇猛な気質等、両者に共通していた点であり、隆應の薫染によるものであった……。」としており、「率直なものいい」など、「茂吉と隆應の間柄は肉親に近いまでのしたしみかた」がうかがわれると述べている。

隆應和尚の仲立があつて、同郷出身で東京浅草医院の院長齋藤紀一家に茂吉が入ったのは、十五歳の時、すなわち、明治二十九年八月のことであった。開成中学校、一高、東大に学び、東京府巢鴨病院に勤務、精神病学専攻。大正三年紀一の次女齋藤てる子(二十歳)と結婚、茂吉三十三歳であった。前年の大正二年に、茂吉は第一歌集『赤光』を刊行。文壇の大きな注目となる。明治三十七年、二十三歳の時『子規遺稿第一篇・竹の里歌』<sup>18)</sup>を読んで作歌を志し、『赤光』の「地獄極楽圖」十一首の原型に当たる歌をその前年に作っている。隆應和尚とのかかわりの少年時代を思わずには居られないところである。一高時代、洋服も着ること少なく、「ミソ少々三瓶ニ頼ンデヤツタ故御めぐみ下サレ」などと故郷の隆應和尚とのつながりを持ち続けている。明治三十九年一月には、

「さくら味噌鯛味噌柚味噌何は有れどふる里の味噌に豈しかめやも。」

「ふる里の味噌食ふときは、ふる里の、村の人々、おもひつゝくふ」

「ふるさとのやまざとひとはあやしかも、畑つ豆より甘き味噌つくる。」

など、味噌の歌十首を隆應和尚に書簡として送るなど、茂吉は隆應和尚との心のつながりを失わない。

長崎医学専門学校教授として赴任。着任したのは大正六年十二月のことである。大正九年『アラギ』（第十三巻第四号）から「短歌に於ける寫生の説」<sup>19)</sup>を連載し始め、「實相に觀入して自然・自己一元の生を寫す」とする『短歌寫生の説』を確立する。（このことについては後にふれる。）大正十年三月には、米原の蓮華寺に隆應和尚を訪ねている。和尚は、大正八年三月二十日付を以て「大本山蓮華寺住職申附候事」との時宗管長大僧正・河野法善よりの辞令<sup>20)</sup>を拝受していた。大正十年三月十四日には、長崎医専での茂吉送別会が行われており、十六日長崎を去り方々の旅を経て東京に帰る前日の二十九日の訪問ということになるが、その年の十月二十七日出発の海外留学の挨拶でもあったろうと察せられる。第三歌集『つゆじも』<sup>21)</sup>の「三月二十九日」に、

「ぬばたまの夜さりくれば湯豆腐をかたみに食へとのたまひにけり」

「夜もすがらそこびえしつつありたるが曉庭に薄氷が見ゆ」

「この寺に隆應和尚よろこびて焦がしたる湯葉をわれに食はしむ」

の三首がある。この間のことについては、全集の「手記」「書簡」ならびに『作歌四十年』<sup>22)</sup>には記載を見つけ得ないでいる。ただ、『作歌四十年』に、「大正十年春に、私は故郷にかへり、暇乞をしたのであった。」と記しているから、「近江番場の蓮華寺に寄って」とのみしか記されていないけれども、「故郷にかへり」「暇乞を」したのと同じような思いの蓮華寺寄りであったろうと思う。「かたみに食へとのたまひにけり」には、尊敬と親和の中に二人が交わしたであろう壮行と感謝の言葉を想定させてくれる。『斎藤茂吉短歌合評上』<sup>23)</sup>では、「この寺に隆應和尚よろこびての歌」について、金石淳彦は、「作歌の弾んだ気持ちがあるまま伝わってくるような、親しみ深い」と評し、芝生田稔は、「焦がしたる湯葉をわれに食はしむ。」をめぐって、前出黒江太郎氏著・隆應和尚の中に、石川隆道氏が「（前略）師僧は大へん焼湯葉がお好きでありました。」と述べていることを引用しているのを見ると、隆應和尚は茂吉の洋行を共に喜び合う心で対されており、それが茂吉の「よろこびて」なのであると思うところである。落合京大氏は、「和尚に対する作者の慶ましい同時に甘えをも含む気持ちが」と評している。いずれにしてもこの一首は、四十歳の茂吉の隆應和尚に対する愛着と私淑を強く感じさせてくれると思うのである。

洋行中、茂吉はしばしば和尚に近況を郵便で知らせ続けるのだが、留学を終えて帰朝の途中で火難を知る。茂吉は蓮華寺に寄る暇もなく東京に帰るのだが、漸く、大正十四年五月二十三日に和尚を尋ね見舞う。

『ともしび』の「近江蓮華寺行其一」・大正十四年五月二十三日、隆應和尚を尋ね病を見舞う。

「茂吉には何かうまきもの食はしめといひ給ふ和尚のこゑぞきこゆる」



「となり間にかすかなるものきこゆなり夜半につまぐる數珠はきこえぬ」

昭和五年・近江番場八葉山蓮華寺小吟 第七歌集『たかはら』の詞書きに、

- ・「隆應上人は六十八歳になりていませり。久々にあいまつるに、(中略)御手足かい細り、常臥のままはや八年を経たまふ。」「わが口髭の白く、かしらの禿げたるのを見たまひて、いたく興がりたまへど、語すでにさだかならず。われら隣室にさがりてくさぐさの物語などしてゐるに上人のみこゑきこゆ。」

「となり間に床臥します上人は茂吉の顔が見えぬといひたまふ」

「茂吉に何かうまさもの食はしめ」と語られ、「茂吉の顔が見えぬといひたまふ」隆應和尚と茂吉との関係について、長男茂太の北杜夫は、その著『壮年茂吉』で

柴生田稔氏は「茂吉の隆應に対する感情は全く親しみ近づき切つてゐて、世間普通の尊敬といふやうなものとは類を異にしてゐる。」(『斎藤茂吉伝』<sup>24)</sup>)と書いている。その人生最初の師が、老いて中風となつて寝こんでいる。しかし、ただ臥床し……。病院のことで難儀している茂吉にとっては、この寺と和尚の存在は寂しさと共に安らぎともなったのではあるまいか。

と記しており、前出の藤岡武雄の「肉親に近いまでの」関係と合わせて読みとれば、まさに茂吉の精神の根源に和尚ありということになるろう。

### 3. 次稿への課題

かかる茂吉の第六歌集『ともしび』について、藤岡武雄をして第二の高峰といわしめたものは何かについて考察を進めながら本稿の目的とするところに論及したいのだが、紀要としての制限ページのため、以下については、“歌集『ともしび』における茂吉の「いのちのあらはれ」(Ⅱ)”として続稿とすることにしたい。

その内容としては、『ともしび』における自然詠を中心に、その作品を鑑賞・解釈しながら茂吉文学の主眼に目を向けた論考を考えている。本林勝夫著『斎藤茂吉の研究・その生と表現』<sup>25)</sup>では、「生命主義的な短歌論に関心を寄せていた茂吉」が、「ようやく独自の新解釈、すなはち、「生を写す」という意味での写生概念の形成のみられるようになってくるのは、ほぼ大正三年あたりから」であるとしたことを踏まえ、また、同じ趣旨を論じた『写生説の研究』<sup>26)</sup>(北住敏夫著)にも基づきながら、『ともしび』の自然詠を考察して行きたいと考えている。大方の御助言をたまわりますようお願いする次第である。

〈付記〉本稿の趣旨・英文訳については、本学教養部英語科の片桐哲郎先生の労を賜ったことを記し、感謝の意を表したい。

註・参考文献

- 1) 『齋藤茂吉全集』全36巻 第1回配本昭和48年1月13日刊第一巻。第36回配本 昭和51年7月28日刊第二十六巻。岩波書店。
- 2) 『齋藤茂吉入門』 編著者・藤岡武雄 平成6(1994)年6月1日 思文閣出版。
- 3) 『改選「赤光」』 齋藤茂吉著、跋文大正10年10月10日 『初版・赤光』跋文大正2年9月24日、東雲堂。
- 4) 『あらたま』 齋藤茂吉著 大正九年十二月廿九日刊 春陽堂。
- 5) 『ともしび』 齋藤茂吉著 昭和25年1月30日刊岩波書店(茂吉44歳~47歳、大正14年~昭和3年)。
- 6) 『アララギ』 齋藤茂吉追悼号 昭和28年10月1日刊「青山脳病院焼失再建當時の茂吉・青木義作」。
- 7) 7の2)『國文學』没後四十年齋藤茂吉特集 平成5年1月10日刊 茂吉隨筆の中の風土と神一『念珠集』と「帯欧隨筆」など。
- 8) 『短歌季刊第三輯』昭和23年2月刊(鶴見大学図書館蔵)『いのちのあらはれに就いて』福田榮一。
- 9) 『童馬漫語』 齋藤茂吉著 昭和23年4月20日刊 「いのちのあらはれ」。
- 10) 『念珠集』 齋藤茂吉著 昭和5年8月12日刊 「第一高等學校思出斷片」。
- 11) 『山と里の信仰』 富田登著 平成8年5月1日刊 弘文館。「縁起と靈山信仰」。
- 12) 『たかはら』 齋藤茂吉著 昭和25年6月30日刊(茂吉48歳、49歳、昭和4年、5年)。
- 13) 長男茂太 北杜夫『この父にして』昭和51年、毎日新聞社。『母の影』1994、新潮社。『青年茂吉』1991年、岩波出版。『茂吉彷徨』1996年、岩波書店。『壮年茂吉』1993年、岩波書店。『茂吉晩年』1998年、岩波書店。
- 14) 『つきかげ』 齋藤茂吉著・第17歌集 昭和29年2月25日刊 岩波書店刊 茂吉、昭和23年1月~昭和28年夏。昭和28年2月25日、茂吉没、享年満70歳9月。『つきかげ』編集者、山口茂吉、柴生田稔、佐藤佐太郎。
- 15) 『茂吉と上山』 鈴木啓蔵著 昭和62年10月1日改訂 齋藤茂吉記念館刊。
- 16) 『隆應の生涯と茂吉』 黒江太郎著 昭和47年11月3日刊 白玉書房。  
『隆應和尚と茂吉』 黒江太郎著 昭和41年9月20日刊。
- 17) 『年譜齋藤茂吉伝』 藤岡武雄著 昭和57年3月20日刊 沖積舎。
- 18) 『子規遺稿第一篇・竹の里歌』 正岡子規著・伊藤左千夫他選編、明治37年11月刊 俳書堂。
- 19) 『短歌寫生の説』 齋藤茂吉著 昭和4年4月12日刊 鐵塔書店。
- 20) 『年譜齋藤茂吉』 藤岡武雄著 昭和57年3月20日刊、沖積舎。
- 21) 『つゆじも』 齋藤茂吉著 昭和21年8月日刊、岩波書店。(茂吉大正6年12月~大正10年3月)。
- 22) 『作歌四十年』 齋藤茂吉著 昭和49年12月15日刊、和綴じ4冊本、中央公論社美術出版。
- 23) 『齋藤茂吉短歌合評』上 土屋文明編 昭和60年10月10日刊 明治書院。
- 24) 『齋藤茂吉伝』 柴生田稔著 昭和54年6月26日刊、新潮社。
- 25) 『齋藤茂吉の研究・その生と表現』 平成2年5月10日刊、桜風社。
- 26) 『写生説の研究』 1990年1月25日刊、日本図書センター。

(平成11年12月6日受理)